

令和 8 年度 IDE 大学セミナー趣意書

「大学教育における身体」

大学教育は従来、教室での講義や演習を中心に、体育を含む実習や実験などの授業科目も開講する形で行われてきた。そこでは、教育者と学習者が同じ時間と空間を共有し、学習者は、時には自ら身体を動かし、他者や事物、環境とかかわっている。つまり、大学における教授・学習活動は、教育者・学習者の存在と、それにまつわる身体性を前提として組み立てられ、実施されてきたと言える。しかし、コロナ禍を契機に急速に進んだオンライン化は、生成 AI などデジタル技術の急速な発展と相まって、大学教育におけるそうした身体のありようを大きく揺るがしている。多くの教授・学習活動がデジタル空間に移行し、知識や技能の習得において、教育者と学習者が同じ場所に身体を置くことが、必ずしも前提ではなくなってきたからである。

こうした状況が見られる一方で、大学教育における身体的な経験や身体知の重要性を認識し、教育課程や教授・学習活動にそれらを組み込む試みが見られるようになっている。大学教育における身体のありように揺らぎが見られる今だからこそ、身体性、身体知に着目し、その意味について考えてみることは有用であろう。

また、大学段階において、それ以前の学校段階と同様に、「身体について学ぶ」ことの意義は大きい。身体は年齢とともに変容し続けるためである。これまでも身体そのものについて学ぶ機会は提供されてきているが、学生に対し、大学生の時期だけでなく、生涯にわたって自らの身体の変容とどのように向き合い、働きかけていけばよいのかを考える機会を提供することは、大学教育にとって変わらぬ価値を持つ役割だと言える。

そもそも「教育基本法」では、教育の目標の一つとして「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」が挙げられている。大学での教育にも適用されるこの目標をふまえたとき、今日の大学教育において「健やかな身体を養う」こととは何を意味するのであろうか。また、そのための学びや経験は、現在の大学教育においてすべての学生に十分に保障されていると言えるだろうか。

これらの問題関心を踏まえて、本セミナーでは、「身体を通じて学ぶ」ことと「身体について学ぶ」ことの 2 つの視点を軸としながら、これからの大学教育において身体をどのように捉え、教育課程や教授・学習活動のなかに身体性や身体知をどのように位置づけていくことができるかについて考えてみたい。